

業務上のコミュニケーションに課題があったてんかんを持つ成人に対する関係フレームスキル訓練の実施とその効果

○香川 絃子（株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所 研究員）
 刈田 文記（株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所）

1 背景と目的

関係フレームスキル（以下「RFS」という。）は、人の言語・認知能力を形成する重要な基盤と考えられている。言語・認知能力に課題のある障害児・者に関係フレーム理論に基づく訓練を実施すると、言語・認知能力の上昇や適応行動が改善することが明らかになっている。海外では、RFSに関するいくつかの訓練パッケージが開発されており、それらの訓練が、障害児を含む幼児・児童により効果を与えることが明らかにされている。一方で、先行研究では、主に、子供を訓練の対象としており、職業場面での成人に対する訓練効果は明らかにされていない。一方で、RFSは業務上のコミュニケーション、作業など、様々な職業場面で用いられている。障害者雇用の場面では、一部のRFSが獲得できていないことにより、コミュニケーションや業務に課題を抱える者は多いと考えられる。そこで本研究では、業務に課題を抱えた障害を有する成人に、PC上で実施できるRFS訓練に取り組んでもらい、訓練の効果を検討することを目的とした。

2 方法

(1) 参加者

広汎性発達障害と診断され、てんかんを有する20代のAさん。株式会社スタートラインのサテライトオフィスサービスを利用する企業で、PC上での事務作業を中心とした業務を行っていた。

(2) 訓練実施前における業務の課題

- Aさんの管理者より、Aさんの業務上の課題について、以下のように報告があった。
- ・業務の指示内容を翌日に忘れていることがある。
 - ・業務指示のメモを取る習慣が身につかない。
 - ・業務のミスが多いものの、ミスに対する認識があまり見受けられない。
 - ・業務上の疑問点等を具体的に認識できていない様子があり、業務上必要な質問を自発的にできない。

(3) 評価

訓練実施前後に対面で以下の評価を行った。

ア PCA（等価性及び関係フレームのモジュール）

PCAは言語・認知能力を評価するツール¹⁾である。PCAから、刺激等価性及び関係フレームのモジュールを用いて評価した。図などの視覚情報から選択的に回答する

理解のテスト、聴覚情報の質問に回答する表出のテストがある。

イ 関係フレームスキルアセスメントテスト（以下「RFSA」という。）

RFSAは職業分野で活用できるRFSの評価シート²⁾である。8つの関係フレームの下位項目（図5）があり、それぞれ6つの設問で構成されている。設問における派生関係は、簡単なものから段階的に難しいものとなるように構成されている。

(4) 訓練

ア 訓練実施期間

約4か月間

イ 訓練課題（表1）

PC上で実施できる刺激等価性スキル及び関係フレームスキルの見本合わせ訓練を行った。課題は、PEAKの訓練パッケージ³⁾を参考に作成したものをを用いた。

ウ 実施方法

Aさんは、週3回程度、20分から30分間、PCを用いて訓練を行った。支援者が、Aさんのそばに座り、正答が難しい課題に対して補完手段やプロンプトを呈示した。

3 結果

(1) 訓練の様子

Aさんは、全訓練を通じて、計173個の課題に取り組んだ（表1）。また、それぞれのモジュールのテスト課題の平均正答率は、刺激等価性 95.9%、関係フレーム 97.2%であった（表1）。正答率が低い課題については、補完手段やプロンプトを用いて正答率100%となるまで繰り返し訓練を行った。

表1 訓練モジュール、課題数、テスト課題の正答率

訓練モジュール	下位項目	課題数	テスト課題の平均正答率(%)
刺激等価性	対称律	25	95.9
	推移律	11	
	等価律	65	
関係フレーム	等位	14	97.2
	比較	14	
	反対	12	
	区別	14	
	階層	6	
	視点	12	
合計		173	

(2) 評価の結果

訓練実施前は、AさんのPCAとRFSAの推移律の得点が、他の項目に比べて低かった（図1、2）。また、無意味な単語や図形が出てくる問題では、無回答が多く見られた。訓練実施後は、PCAとRFSAともに、推移律の得点が向上した（図1、2）。また、無意味な図形や言葉に対しても正しく回答できるようになった。PCAとRFSAともに、訓練実施後には、比較や区別の関係フレームの得点が高くなった（図3、5）。また、RFSAでは、訓練実施後に時間と空間の得点が高くなった（図5）。PCAの表出の得点は、訓練実施後、全体的に向上した（図4）。

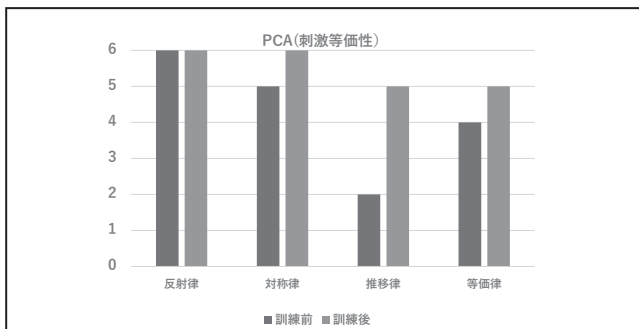


図1 PCAの刺激等価性得点の得点変化（6点満点）

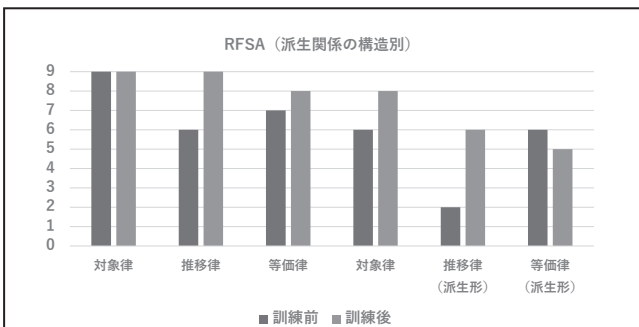


図2 RFSAの刺激等価性の構造別に見た得点変化（9点満点）

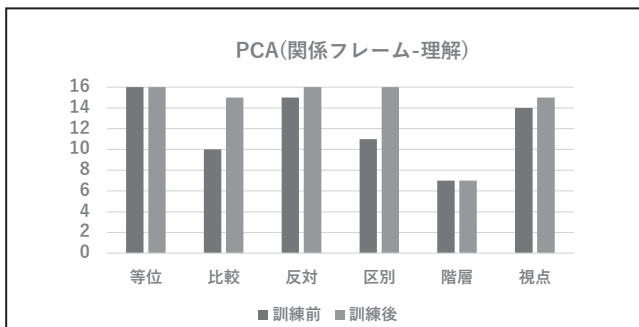


図3 PCAの関係フレーム理解の得点変化（16点満点）

(3) 行動変化

Aさんの支援員及び管理者から、訓練中、業務中に以下のような行動の変化について報告があった。

- ・訓練の際にメモを書くことを助言すると、刺激同士の関係性をメモに取り、それを活用することができるように

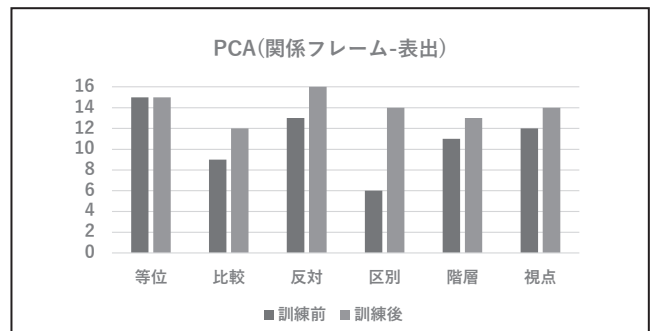


図4 PCAの関係フレーム表出の得点変化（16点満点）

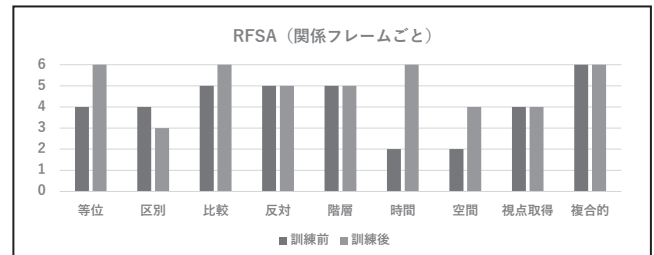


図5 RFSAの関係フレーム別に見た得点変化（6点満点）

なった。その後は、自発的にメモを取ることができるようになっていった。

- ・業務中、自分がわからないことに気づき、それを質問する行動が増えてきた。
- ・質問について「これまで、自分は、具体的な質問ができてなかった。もっと具体的な質問をすることが大事だ」という自らの発言があるなど、質問を整理することの大切さについての気づきが見られるようになった。

4 考察

評価の結果、AさんのRFSが向上した。また、業務場面でも、Aさんの行動にポジティブな変化が見られた。Aさんは、業務上、自分がわからない部分に気づけるようになり、それを質問できるようになったが、これらの変化は刺激等価性スキルやRFSの向上によって影響を受けた可能性がある。また、訓練中、メモを取る行動が確立されたことで、業務面にも生かせるようになったと考えられる。今後、多くの方々にRFS訓練を提供し、職業場面での効果について、さらに検討していきたいと考えている。

【参考文献】

- 1) Dixon, M. R. PEAK comprehensive assessment. Shawnee Scientific Press. 2019
- 2) 岩村賢 「関係フレームスキル (RFS) アセスメントシートの開発とその試行について」第28回職業リハビリテーション研究・実践発表会 発表論文集 (2020)
- 3) Dixon, M. R. The PEAK relational training system. Carbondale: Shawnee 2014-2016